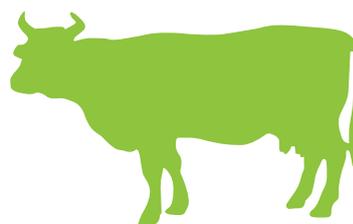


牛肉



◆飼養動向

29年2月現在の肉用牛飼養頭数、0.8%増加

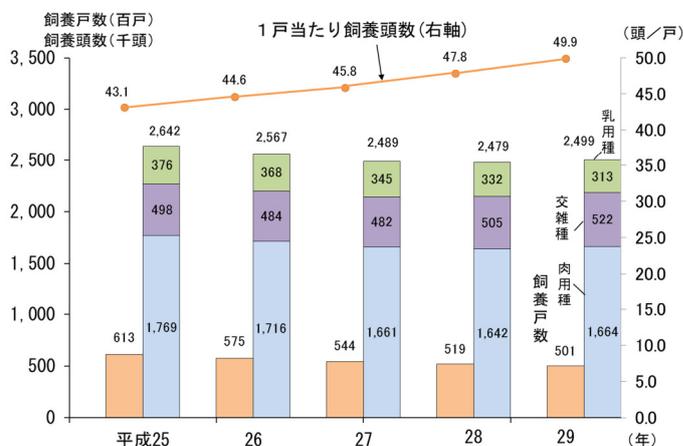
肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いている。平成29年は、5万100戸（前年比3.5%減）となった。

総飼養頭数は、22年以降減少傾向にあったが、29年は249万9000頭（同0.8%増）と7年ぶりに増加に転じた。品種別に見ると、肉用種は22年に発生した口蹄疫の影響などにより減少していたが、繁殖雌牛頭数が28年度以降増加傾向に転じ、29年は166万4000頭（同1.3%増）と7年ぶりに増加となった。乳用種は22年に一時的に増加したものの、23年に再び減少に転じ、29年は31万3100頭（同5.6%減）となった。交雑種は、子牛価格高騰を受けた酪農家での乳用種への黒毛和種交配率の上昇により28年は4年ぶりに増加に転じ、29年は52万1600頭（同3.2

%増）と2年連続で増加となった。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、49.9頭（同4.3%増）とやや増加した（図1）。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在。なお、29年は概数値。

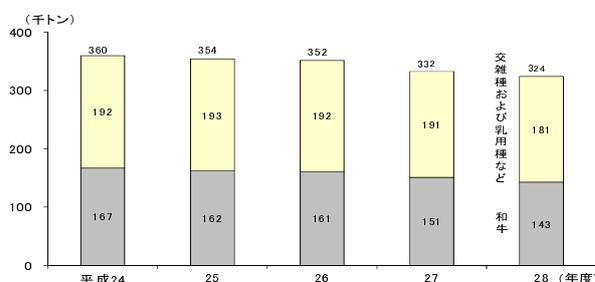
◆生産

28年度の生産量、2.5%減少

牛肉の生産量は、平成21年度以降、和牛が増加する一方で、交雑種および乳用種の減少により、減少傾向で推移してきた。24年度は、酪農家での黒毛和種との交配が進み、交雑種の生産が増加に転じたことから、牛肉全体の生産量は4年ぶりに増加した。しかし、高齢化に伴う離農の進行や22年に発生した口蹄疫、また、23年8月の大規模生産者の経営破たんなどにより繁殖基盤が縮小し、25年度以降、減少傾向で推移している。28年度は、交雑種が7万9173トン（前年度比同5.4%増）と同年度を上回ったものの、和牛が14万2653トン（同5.6%減）、乳用種が9万8313トン（同3.8%減）と減少し、全体では32万4258ト

ン（同2.5%減）と4年連続の減少となった（図2）。

図2 牛肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：部分肉ベース。

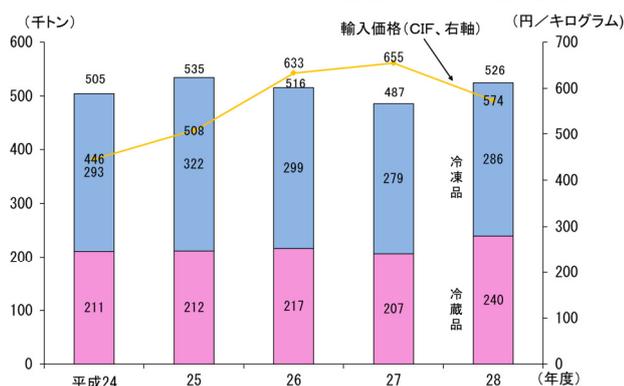
2：交雑種および乳用種などには、外国種などを含む。

◆ 輸入

28年度の輸入量、増産傾向にある米国産の割合が増加

牛肉の輸入量は、国内の生産量が減少する中で、比較的安価な輸入牛肉需要の高まりなどを背景に、平成20年度以降、増加傾向で推移してきた。25年度は、外食需要の増大や25年2月の米国産の牛海綿状脳症（BSE）に関する月齢緩和措置などを背景に、53万5134トン（前年度比5.9%増）とやや増加した。26年度は、一部外食チェーンの業績悪化に伴う需要の減少や為替の円安基調、米国西海岸港湾労使問題の影響などにより、51万6200トン（同3.5%減）と減少に転じ、27年度も現地相場高や円安基調の影響により前年度を下回った。

図3 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格

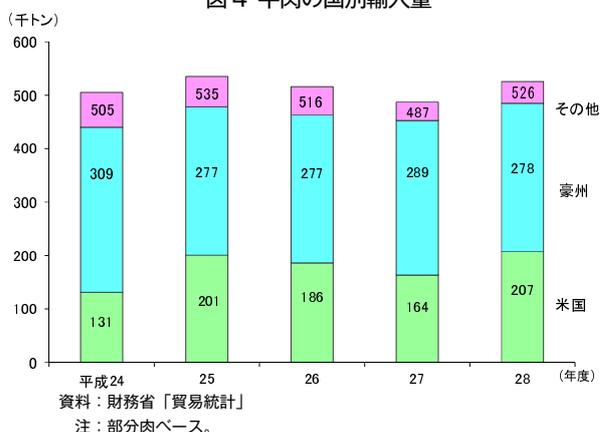


資料：財務省「貿易統計」
注1：冷凍品にはくず肉などを含む。
注2：部分肉ベース。

28年度は、国産牛肉高から輸入牛肉需要が高まったことや、米国の現地相場安などにより、52万5694トン（同7.9%増）と3年ぶりに増加した（図3）。

28年度の国別輸入量を見ると、豪州産が27万7606トン（同4.0%減）とやや減少した一方、米国産が20万7422トン（同26.7%増）と大幅に増加した。日豪EPA発効3年目の同年度は、豪州産の関税率が冷蔵品30.5%、冷凍品27.5%に削減されたものの、出荷減により高値が続いているため、生産量の回復している米国産にシフトしたものとみられる（図4）。

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

◆ 消費

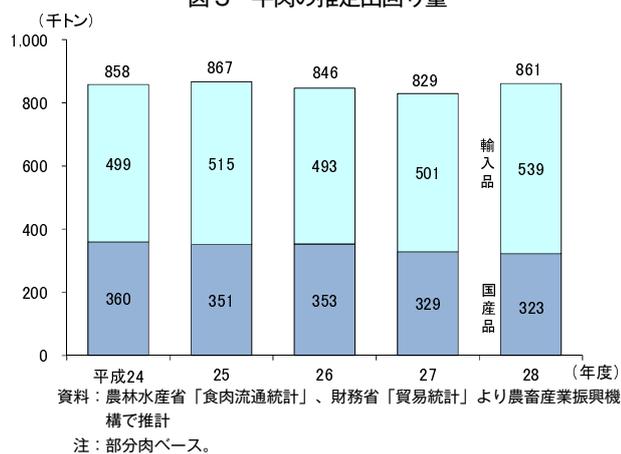
28年度の推定出回り量は3.8%増加、家計消費は3.0%増加

推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、平成26年度は一部外食チェーンの業績悪化などによる輸入量の減少により、84万6103トン（前年度比2.4%減）とわずかに減少した。27年度は、輸入品は50万834トン（同1.6%増）と前年度をわずかに上回った一方、国産品は32万8520トン（同7.0%減）と前年度をかなりの程度下回り、全体では82万9353トン（同2.0%減）と2年連続で減少した。

28年度は、86万1098トン（同3.8%増）と3年ぶりに増加に転じた。このうち、国産品は32万2533トン（同1.8%減）と前年度をわずかに下回った一方、輸入品は53万8565トン（同7.5%増）と前年度をかなりの程度上回った。国内生産量の減少により、国産牛肉価格の高止まりが続く中、より安価な輸入牛肉に需要がシフトしたとみられる（図5）。

図5 牛肉の推定出回り量

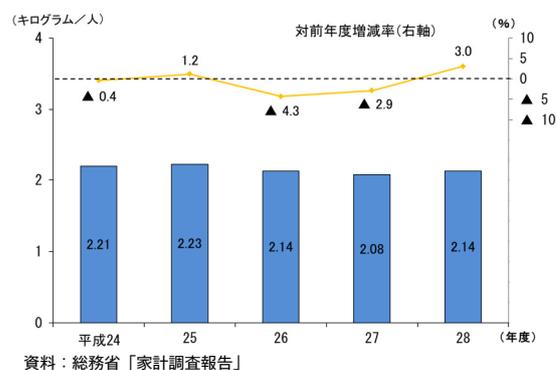


家計消費

牛肉需要の約3割を占める家計消費は、平成22年度以降、景気低迷による消費の減退、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射性セシウム検出問題な

どを背景に、減少傾向で推移してきた。26年度は、相場高による豚肉、鶏肉へのシフトなどにより年間1人当たり消費量は2.1キログラム（前年度比4.3%減）と減少し、27年度も、3年度以降最少となる同2.1キログラム（同2.9%減）となったが、28年度は同2.1キログラム（同3.0%増）と前年を上回った（図6）。

図6 牛肉の家計消費量（年間1人当たり）

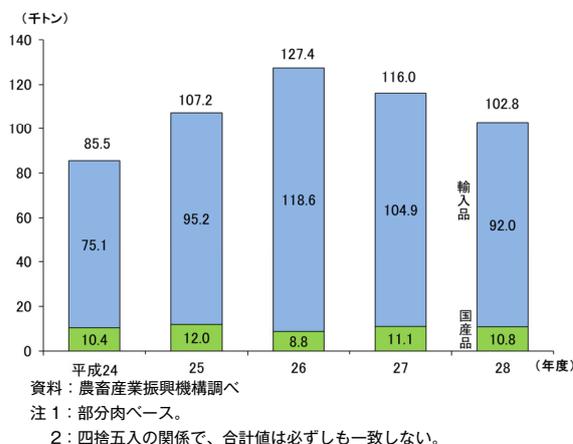


◆在庫

28年度の推定期末在庫量、11.4%減少

牛肉の推定期末在庫量は、平成26年度は国産品が減少した一方、輸入品が一部外食チェーンの業績悪化による需要量の減少などにより大幅に増加した結果、全体では、12万7418トン（前年度比18.9%増）と前年度に引き続き、高い水準となった。27年度は、国産品は前年度を上回ったものの、輸入品の在庫調整が続いたことから、全体では11万5994トン（同9.0%減）と前年度をかなりの程度下回った。28年度は、前年度から引き続き、輸入品を中心に在庫調整が続いたことから、10万2793トン（同11.4%減）と前年度をかなり大きく下回った。このうち、輸入品は9万2020トン（同12.3%減）、国産品は1万773トン（同3.0%減）といずれも前年度を下回った（図7）。

図7 牛肉の推定期末在庫量



◆枝肉卸売価格

28年度の和牛卸売価格、高値を更新

省令規格

牛枝肉卸売価格（東京・省令規格）は、平成26年度は、出荷頭数の減少や消費増税の影響もあり、1キロ

グラム当たり1281円（前年度比10.1%高）、27年度は前年度を大幅に上回る同1624円（同26.8%高）と高騰した。

28年度は、輸入量が増加したことや主に交雑種の出

荷頭数が増加したことなどから、同 1584 円（同 2.5 %安）と前年度をわずかに下回った（図 8）。

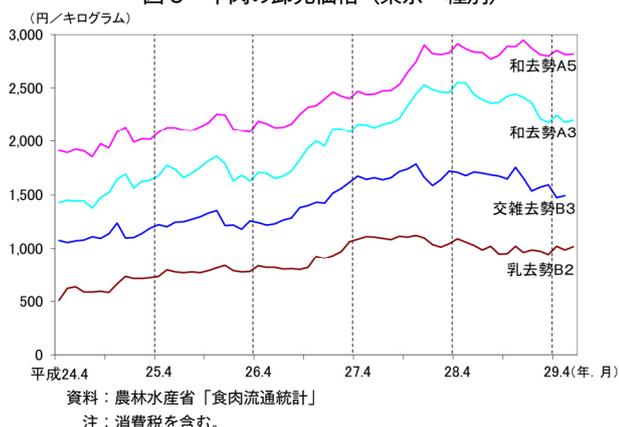
図 8 牛枝肉の卸売価格（東京・省令規格）



和牛

和牛（去勢）の卸売価格は、平成 23 年度後半から徐々に回復し、26 年度は、A5 が 1 キログラム当たり 2282 円（前年度比 6.7%高）、A3 が同 1874 円（同 8.6%高）と上昇した。27 年度は、全国的な出荷頭数の減少や輸入量の減少、インバウンド需要の増大、堅調な輸出需要などから、記録的な高値で推移し、A5 が同 2634 円（同 15.4%高）、A3 が同 2310 円（同 23.2%高）と大幅に上昇した。

図 9 牛肉の卸売価格（東京・種別）



28 年度は、前年度に続き、インバウンド需要や輸出需要などを背景に A5 が同 2854 円（同 8.4%高）、A3 が同 2392 円（同 3.6%高）と高水準で推移した（図 9）。

乳用種

乳用種（去勢 B2）の卸売価格は、平成 24 年度は 1 キログラム当たり 639 円（前年度比 35.3%高）と放射性セシウム検査による風評被害から回復し、22 年度実績に迫る水準となった。25 年度は、競合する輸入品価格が高水準で推移していたこともあり、同 784 円（同 22.6%高）と前年度を大幅に上回り、26 年度は同 875 円（同 11.7%高）とかなり大きく上昇した。27 年度も上昇傾向が継続し、同 1085 円（同 24.0%高）と前年度を大幅に上回ったが、28 年度は乳用種の肉質と競合する輸入牛肉の増加などを背景に同 1000 円（同 7.9 %安）と 5 年ぶりに低下した。

交雑種

交雑種（去勢 B3）の卸売価格は、平成 24 年度は乳用種と同様に放射性セシウム検出による風評被害から回復基調に転じ、25 年度は、景気回復などもあり、1 キログラム当たり 1249 円（前年度比 12.8%高）とかなり大きく上昇した。26 年度は、生産量の減少や和牛の相場高による交雑種への需要シフトなどもあり、同 1351 円（同 8.2%高）とかなりの程度上昇した。27 年度も上昇傾向が継続し、同 1668 円（同 23.5%高）と前年度を大幅に上回ったが、28 年度は、和牛よりも安価な交雑種の需要が堅調であったことから、同 1670 円（同 0.1%高）と前年度並みとなった。

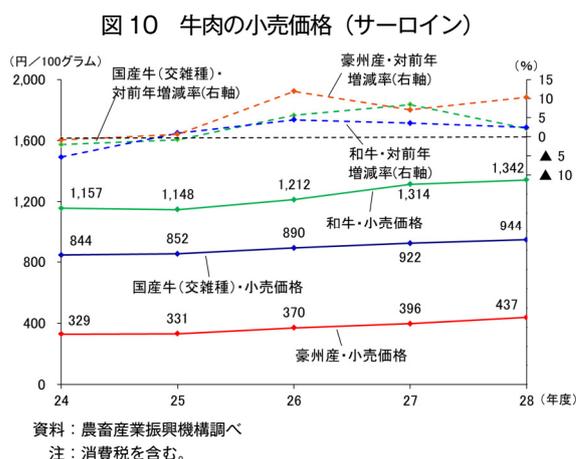
◆小売価格

28 年度の小売価格、国産品、輸入品ともに値上がり

牛肉の小売価格（サーロイン）は、消費者の経済性志向の高まりにより高級部位が敬遠されたことから、平成 21 年度以降、横ばい、もしくは低下基調で推移し

てきた。26 年度は、消費増税に加えて、相場高による価格転嫁が行われたことで、和牛は 100 グラム当たり同 1212 円（前年度比 5.6%高）と上昇に転じ、国産

牛（交雑種）は同 890 円（同 4.5%高）、豪州産牛肉は同 370 円（同 11.8%高）といずれも上昇した。27 年度も上昇傾向が継続し、和牛は同 1314 円（同 8.4%高）、国産牛（交雑種）は同 922 円（同 3.6%高）、豪州産牛肉は同 396 円（同 7.0%高）と前年度を上回った。28 年度は、国内生産量の減少や輸入牛肉需要の高まりなどを背景に、和牛は同 1342 円（同 2.1%高）、国産牛（交雑種）は同 944 円（同 2.4%高）、豪州産牛肉は同 437 円（同 10.4%高）となった（図 10）。



◆肉用子牛

28 年度の肉用子牛価格、黒毛和種、交雑種は前年比高

黒毛和種

家畜市場における黒毛和種の子牛取引価格は、繁殖基盤の縮小に伴う出生頭数の減少などにより、平成 22 年度から上昇傾向で推移している。26 年度は、堅調な枝肉卸売価格に後押しされ、1 頭当たり 57 万円（前年度比 13.3%高）と前年度をかなり大きく上回り、27 年度も同 68 万 7000 円（同 20.6%高）と大幅に上昇した。28 年度は、同 81 万 5000 円（同 18.6%高）と過去最高値となった。

取引頭数は、23 年度以降は若干回復基調となったものの、繁殖雌牛の減少に伴い出生頭数が減少したことから、26 年度は 33 万 3995 頭（同 4.9%減）、27 年度も 32 万 2608 頭（同 3.4%減）とやや減少した。28 年度も 30 万 9802 頭（同 4.0%減）と減少傾向が続いている。（図 11）。

ホルスタイン種

ホルスタイン種の子牛取引価格は、平成 23 年度以降、取引頭数の減少により、上昇傾向で推移した。26 年度は、堅調な枝肉卸売価格にも後押しされ、1 頭当たり 14 万 6000 円（前年度比 14.2%高）と上昇し、27 年度も同 22 万円（同 51.4%高）と大幅に上昇した。28 年度は、出荷頭数が前年度を上回ったことや枝肉相場が軟調にあったことなどから、同 21 万円（同 4.9%安）と低下に転じた。

交雑種

交雑種の子牛取引価格は、平成 23 年度以降は取引頭数の増加により低下傾向で推移していたが、25 年度は取引頭数の減少により上昇に転じ、26 年度は 1 頭当たり 32 万 5000 円（前年度比 8.6%高）と上昇し、27 年度も同 38 万 5000 円（同 18.5%高）と大幅に上昇した。28 年度も枝肉相場が堅調であったことから、同 41 万円（同 6.4%高）と上昇傾向で推移している。

図 11 肉用子牛の市場取引価格と黒毛和種取引頭数

